



澄む

澄んだ、と言われる瞬間がある。

声が柔らかくなったとか、
表情が穏やかになったとか、
空気が軽くなったとか。

外側は、そう見える。

けれど内側では、
何も増えていない。

むしろ、
いくつかが、剥がれたただけだった。

濁りが消えたのではない。

混ざっていたものが、
混ざらなくなった。

怒りは怒りの場所へ。
不安は不安の場所へ。
期待は期待の場所へ。

それぞれが、
それぞれの輪郭を取り戻す。

何度も、何度も。

混ぜない。
混ぜない。
混ぜない。

澄むとは、
静かではない。

混ざっていたものが、
ひとつずつ、
戻っていく。

戻ってしまう。

だから澄みは、
やさしさとは関係がない。

戻ってしまったものは、
もう、混ざらない。

怒りは、
怒りとして残る。

悲しみも、
そのまま残る。

薄まらない。

どこにも、逃げない。

それでも、
もう濁らない。